

分担研究:不育症における多のう胞性卵巣症候群

研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者 尾崎康彦 名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者 鈴森伸宏 名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者 佐藤 剛 名古屋市立大学大学院医学研究科講師
研究協力者 北折珠央 名古屋市立大学大学院医学研究科助教

研究要旨

多のう胞性卵巣症候群 PCOS が不育症と関与していると報告されているが、診断基準が統一されていないため、結論が得られていない。最近、国際診断基準と日本産科婦人科学会の診断基準が確立されたが、日本の基準は欧米の基準よりも厳しい基準となっている。国際基準を用いて 6.2%、日本の基準を用いて 1.5% が PCOS と診断された。PCOS, PCO 形態, LH 上昇, free T 上昇, 肥満 はそうでない患者と比較して次回妊娠生児獲得率は変わらなかった。

A. 研究目的

多のう胞性卵巣症候群 PCOS が不育症と関与していると報告されている。しかし、それぞれの診断基準は統一されていないため、結論が得られていない。最近、アムステルダム診断基準と日本産科婦人科学会の診断基準が確立されたが、日本の基準は欧米の基準よりも厳しい基準となっている。本研究では療法の基準を用いた反復流産患者における PCOS の頻度、次回妊娠帰結について調べた。

B. 研究方法

195 人の原因不明反復流産患者について PCOS, PCO 形態, LH 上昇, テストステロン上昇, 肥満の次回妊娠帰結への影響を調べた。

本研究は名古屋市立大学倫理委員会の承認を得た。

C. 研究結果

アムステルダム診断基準を用いて 6.2% (12/195)、日本の基準を用いて 1.5% (3/195) が PCOS と診断された。PCOS, PCO 形態, LH 上昇, free T 上昇, 肥満 はそうでない患者と比較して次回妊娠生児獲得率は変わらなかった。

D. 考察

反復流産患者における PCOS 患者は 6.2% であり、欧米の報告より少なかった。欧米では PCOS に対してメトホルミン投与により生児獲得率が上昇するという報告があるが、本邦においては PCOS、肥満も次回帰結に影響しない結果であった。しかし、排卵誘発のためにクロミフェン、hMG、メトホルミンを使用している症例もあり、十分な解析と言えない。

E. 結論

本邦における不育症患者の PCOS は 6.2% の頻度であった。メトホルミンが有効かどうかはさらなる検討が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Sugiura-Ogasawara M, Sato T, Suzumori N, Nakanishi T, Nozawa K, Ozaki Y. The polycystic ovary syndrome does not predict further miscarriage in Japanese couples experiencing recurrent miscarriages. Am J Reprod Immunol 2009; 61: 62-67.

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Sugiura-Ogasawara M, Sato T, Suzumori N, Nakanishi T, Nozawa K, Ozaki Y.	The polycystic ovary syndrome does not predict further miscarriage in Japanese couples experiencing recurrent miscarriages.	Am J Reprod Immunol	61	62-67	2009